

An Analysis of Rhetorical Features and Logical Anomalies in the EFL Argumentative Essays Written by Japanese University Students [論文要旨及び審査の要旨]

著者	山下 美朋
発行年	2019-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第729号
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017045

[24]

氏名	やました みほ 山下 美朋
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学位記番号	外博第22号
学位授与の日付	2019年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	An Analysis of Rhetorical Features and Logical Anomalies in the EFL Argumentative Essays Written by Japanese University Students.
論文審査委員	主査教授 竹内 理 副査教授 山根 繁 副査教授 水本 篤 専門審査委員 准教授 今尾 康裕（大阪大学大学院）

論文内容の要旨

山下美朋氏の博士学位請求論文 *An analysis of rhetorical features and logical anomalies in the EFL argumentative essays written by Japanese University students.*（日本人大学生の英語論証文に見られる論理的特徴と論理破綻の傾向）は、3つの研究を中核として、以下の10章から成り立っている。

第1章：Introduction（序章）

第2章：Literature Review（先行研究の概観）

第3章：Study Objectives and Research Questions（研究の目的と研究課題）

第4章：The Design and Development of KUBEC（研究デザインとKUBECの開発）

第5章：The Four Analytical Framework（4つの分析枠組み）

第6章：Methods and Procedure（方法と手続き）

第7章：Study 1（研究 1 パラグラフ内の結束性）

第8章：Study 2（研究 2 パラグラフ間の結束性）

第9章：Study 3（研究 3 論理上の逸脱）

第10章：Conclusion（結論）

References（参考文献、199編）

Appendices (1-11)（付録）

2022年から実施に移される高等学校新指導要領では、外国語科に「論理・表現 I・II・III」が設置されるなど、日本人英語学習者の論理的思考の欠如への懸念から、特に「論理的に書く」指導への要求が高まっている。大学においても、文部科学省が打ち出しているグローバル化、研究力強化のもとで、他国と比較して研究論文の発表数が激減している状況を打破するべく、「英語で論理的に書く」力の養成は必須となっている。しかし、高等学校までの英語の授業では必ずしもライティングが重要視されてきたとは言えず、高等学校ではパラグラフ

を用いたライティングを経験した学生もいるものの、未だに短文の和訳を中心とした活動が多いと報告されている。また、多くの大学ではプロセスを重視したエッセイライティングの授業が主流となっているものの、そこでも大学生の「英語で論理的に書く力」の欠如が強く指摘されている。このため、論理面での指導が急がれるが、ライティング指導の中心となっているのは、正確に書く、つまり正しい文法や語彙の指摘が中心で、教師のフィードバックは論理的側面にまで及んでいないのが実情である。

以上のような社会的背景のもと、山下氏は日本人大学生の書く英文の実態、特に論理的特徴を明らかにすることを本博士学位請求論文の目的とした。これまであまり着目されてこなかった大学生のL2ライティングの論理的特徴や論理破綻の傾向を知り、その原因を探ることで、今後どのような指導を行えば良いのかという示唆を得たいと考えたためである。

第1章では、本研究の端緒となった筆者の経験と日本の英語教育の実情から、高校生や大学生に英文を書く力が欠如していること、及びその教育の必要性を述べている。続く第2章では、本論文の研究課題を設定するために、これまでの外国語(L2)ライティング研究を、国内外の先行文献から概観している。山

下氏は、まず L2 ライティング研究の歴史的発展を述べたのち、L2 ライティングに影響を与える要因を探る一連の研究について触れ、(1) L2 習熟度、(2) L1・L2 ライティング能力、(3) L1・L2 における作文経験、(4) メタ知識(ストラテジーなど)、そして(5) L1・L2 における作文教育の経験が、重要な要因であることを明らかにした。これらを基にして、母語(L1)ライティング能力があっても、一定以上のL2習熟度がなければL2学習者は良い文章が書けないこと、またL1およびL2のライティングの知識があってもそれをテキストに反映させるには、L2習熟度および書く訓練が必要であることを指摘した。

筆者は、次に English as a foreign language(以後 EFL)/English as a second language(以後 ESL) 学習者の L2 ライティングに使用される語彙や文法をコーパス言語学研究の立場から明らかにしようとした一連の研究、および誤用に関する先行研究を概観し、(i) 学習者のテキストは英語母語話者のそれと比較して非常に限られた語彙や文法項目を高頻度で使用していること、(ii) 話し言葉を多用するなど、レジスターを混同していること、(iii) I think など書き手中心の視点で書かれていること、などの傾向があることを指摘している。

続いて、論理的側面に着目した研究に目を転じ、Kaplan (1966) が、異なる文

化的背景を持つ書き手の L1 テキストの論理的特徴を示し、対照修辞学研究が広まったことを受けて、L1 テキストの特徴を明らかにする研究と、L1 と L2 テキストの比較から L2 テキストの特徴を明らかにしようとした研究が行われてきたと指摘している。後者は、L1 の思考様式が L2 テキストを書く際に影響を与えているのかを分析したもので、日本人を対象とした研究には、Kamimura (1996)、Kubota (1998)、Oi (1984) などがあるという。これらの研究では、日本人学生が書いた英文の多くが演繹的論理展開であるが、その原因が L1 の転移であるかを調査している。しかし、決定的な結果は得られていない上、現在では L2 学習者が書いた文章にあいまいさや分かりにくさがあるのだとすれば、それは L1 の転移とは限定できず、L2 習熟度や過去に受けた作文教育や経験など様々な要因に起因するものとされているという (Kubota, 2004; Matsuda, 1997)。

山下氏はさらに日本人の英文の論理的弱点を L2 ライティング教育の観点から分析した研究についても言及し、(a) 日本人の学生の書いた英文にパラグラフの概念が欠如している、(b) 根拠部分が弱い、(c) 論理展開が直線的でなく読み手に推論させる、(d) 冗長的である、などの特徴があることを示した。最後に、L2 ライティングに影響を与える一要因としてあげられている日本における L1 およ

び L2 の作文教育についても詳述している。L1 では小学校から起承転結や感想文など書き手の感情を綴る作文教育が中心で、大学入試直前に小論文を学んだ学生以外は日本語で論理的に書く教育を受ける機会が少ないこと、L2 ではパラグラフを基本としたアカデミック・ライティングの教育が中・高等学校で欠けていることが示され、そのために大学生の英文に過去に受けた L1 の影響が出るなどの考え方があることを明らかにしている。

第 2 章で紹介した日本人大学生の書いた英文の特徴を分析した先行研究のなかでも、語彙・文法を分析した研究は相当に多い。しかし、論理に焦点を置き、論理構造パターンを類型化し、論理破綻の特徴、ならびに理由を日英対照で分析し議論したものはほとんどない。これを受けて、山下氏は、日本人大学生の英文に見られる論理的特徴、論理破綻の原因を、L2 ライティングに影響を及ぼす要因として先行研究で指摘されている (A) L2 習熟度、(B) L2 作文経験、(C) L2 作文教育との関係から探ることを課題として設定した。また、本論文では、英文に見られる論理破綻が母語の発想の影響によるものであるのかどうかという点にも着目し、研究を進めることとした。

第 3 章では、以上の議論を受けて、本論文の研究課題を次のように明示し、

こられを3つの研究で解明していくと述べている。

- (1) 日本人大学生の書く英文の論理的特徴ならびに特徴的なパターンを明らかにし、L2（英語）習熟度、L2 作文経験、L2 作文教育との関係を探る。
- (2) 日本人大学生の書く英文の論理破綻の特徴を明らかにし、その原因を和文との比較により探る。

続く第4章では、研究で利用したデータ源となる「関西大学バイリンガルエッセイコーパス」（以後、KUBEC）について報告している。KUBECは、日本人大学生の英文ライティング能力を総合的に把握することを目的に2012年度から3年間にわたり関西大学の研究者により構築された大規模学習者コーパス（収容語数300万語）である。対象となったのは同大学の学部専門科目「英語ライティング2」を受講した外国語学部（Gグループ）と、「英語ライティング3」を受講した法学部（Lグループ）の学生である。Gグループは、大学2年次に、約1年間にわたり海外の提携大学で勉強するStudy Abroad Programに参加しているが、Lグループに海外留学経験はない。前者は日本人大学生のうちの上級者層を、また後者は平均的な層を代表するものと位置付けられた。

第5章では、本論文の研究のために援用した分析的枠組みを詳述している。

分析的枠組みは、(i) エッセイの機能的構造分析、(ii) 各文間の論理関係および修辞構造分析、(iii) キーワード連鎖分析、(iv) メタディスコース分析の4つであった。i) の分析手法は、パラグラフ内に必要とされるトピックセンテンスやサポーティングセンテンスなどの機能的構成要素の有無および配列、(ii) は Mann & Thompson (1988) の談話分析理論を援用した文間の論理的・修辞的關係の分析、(iii) は談話の核となる語彙の連鎖および結束構造、(iv) は Hyland (2005) が提唱するメタディスコース・マーカのうち、特に論理接続詞・接続副詞などのつなぎ言葉の使用傾向と頻度を調査している。これらの分析規準は、文章の論理を「一貫性・結束性」から見た先行研究を基に選定されている。

第6章では、分析対象とした学生の様々な属性、データの分析方法、並びに KUBEC データの一部(2名)を使用し、4つの枠組みの有用性を検証した予備的研究について述べている。この有用性の予備検証の後、以下に述べる本研究では、KUBEC (Ver.2013) のデータから G グループを更に TOEFL の点数で、上位を G1 (10名)、中位を G2 (10名) に分け、相対的にみて下位に位置する L グループ (9名) と合わせて総計 29 人分計 58 例の論証文を分析対象としている。

第7章では、Study 1 として、分析的枠組みの (i) エッセイの機能的構造分析

と (ii) 各文間の論理関係および修辞構造分析を報告している。その結果、G1 と G2 はほぼ同じ論理の構造を持っており、エッセイの導入部の後半で書き手の主張と議論の方向付けを行い、展開部の各パラグラフで、導入部で定めた議論が展開され、結論部で再度、主題文を出してまとめる形式となっていることが判ったという。特に展開部ではエッセイのトピックに特徴的な論理関係、つまりプロトタイプ的な「論理の型」(Hoey, 1983) が見られたことになる。その一方で、Lグループでは、導入部の最初に主題文が置かれ、議論の方向付けがないために、導入部や展開部で論理が破綻する傾向が顕著であったという。

第8章では、Study 2として、分析的枠組みの (iii) キーワード連鎖分析と(iv) メタディスコース分析について述べている。ここでも、第7章で見られたように、G1 と G2 でほぼ同様の結果が得られたという。つまり、議論の中心となるキーワードが所定の場所に置かれ、エッセイ全体を通して繰り返されていた。具体的には、議論の方向付けとなるキーワードが主題文に含まれ、各キーワードは順番に、展開部の各パラグラフのトピックセンテンスに置かれ、結論部の最初の一文に議論を再話する形で置かれていた。また、特徴的な談話マーカの使用、特に列挙 (firstly, secondly, finally)、逆接や対比 (however)、理由 (because)

を表す接続副詞が論理展開を助けていた。Lグループでは、キーワードが方向付けとして導入部に置かれておらず、展開部でも散発的であるため非論理的な展開になっているエッセイが多くみられ、また Gグループと比較してメタディスコース・マーカの使用は and, but, so, for example などに限られていた。

Study 1 と Study 2 の結果は、Gグループと Lグループの「L2 習熟度」による違いと、授業を受講するまでに受けた「L2 の作文教育」および「L2 作文経験」の差によるもので、前者は、1年時に学んだアカデミックライティングの知識と、2年時に Study Abroad program のもとで書いた作文の量が今回の結果に大きく作用しているものと考えられた。一方で後者は、授業で論理構造などを学んでおり、その知識はあっても英語力の低さや作文経験の欠如から、適切な論理構造を持ったエッセイの産出が難しいものと考えられた。

第9章の Study 3 では、分析的枠組みの (ii) 各文間の論理関係および修辞構造分析において非論理タグが付された箇所がどういった逸脱であるのかを、同じ学生が書いた英文と和文を比較して調査している。分析の結果、英文では論理逸脱と見られた箇所が和文では逸脱ではなく、和文の論理展開（およびその表層構造）をそのまま英文に転用した場合に英文の破綻が見られることが判った。

論理逸脱の特徴として Wikborg (1990) などがあげた 8 つの例が特定されたが、本章ではそのうち最も頻度の多かった「(直前の情報と直接) 関連性の無い情報の存在」と「唐突な論理の飛躍」の 2 つを詳述している。これらは主に L グループに多く見られたが、習熟度に関わらず G グループでも散見された。それら逸脱の原因として明らかになったのは、(a) 展開部のパラグラフが演繹的論理展開であり、英文では最初に来るべきトピックセンテンスが無いか、もしくは機能していない、(b) 和文の特徴である「冗長性」が転用され同じ議論が繰り返されている、(c) 日本語の「読み手に推測させる」発想が英文で上手く機能していない、などである。英文の論理展開は直線的でなければならないが、複数の話題が 1 つのパラグラフ内に存在し、思いつくままに書く、L1 作文（いわゆる感想文形式）の影響が強く出ていることも指摘されている。

Study 3 の結果から、Study 1 および Study 2 の考察と同様に、論理逸脱においても、「L2 習熟度」、「L2 作文経験」、ならびにこれまでに受けた「L2 作文教育」の差が大きく影響していると筆者は主張している。L グループの学生は、パラグラフ構造を理解していない上に、正しい単語や文法を選択する時点での認知的な負荷が高く、論理の流れまでを意識して書けないと考えられた。一方で G グ

ループの学生はエッセイ全体の流れを意識し、書きながら修正することができるなど、十分な英語力、作文経験、そして教育も受けていた。論理破綻に関しては、主にLグループにおいて日本語の発想で英文を書いた場合に顕著であり、学生はこれまでの「L2 作文教育」の欠如から L1 作文の知識に頼らざるを得なかったのではないかと山下氏は推察している。

第 10 章では、以上の研究結果をまとめ、それらの限界点と教育的示唆、ならびに将来の研究の可能性について言及している。本研究の限界として、(A) データの数が少なかったため分析の結果を一般化できないこと、(B) G グループを更に 2 つのグループに分けたが、標準偏差で緩衝帯を設けるという考えがなく、それぞれの習熟度の違いを結果に十分に反映できなかった危険性があること、また (C) エッセイというプロダクトのみを分析対象として、作文のプロセスを分析できなかったため原因の特定に限界があったことなどをあげている。

教育的示唆としては、特に L グループに英語のパラグラフの概念が欠落していたことが明らかであったため、L2 の習熟度が低く L2 作文の経験が少ない学生に対しては、(1) パラグラフの構造と構成要素を教える、(2) 上記 (1) の知識を伝授するだけでなく、パラグラフからエッセイに至るまで段階的に書

く機会を与える、(3) 書き始める前のプランニングを重要視し、論理的な流れを意識しながら日本語で内容をアウトライン化させる、(4) 個々人が書いていく過程で適宜、文法や語彙だけでなく、論の流れなどに対してフィードバックを与える、などを提案している。加えて、(5) 日本語の作文において特徴的な演繹的な論理展開や、個人の感情を吐露するような書き方は、英文では論理の逸脱とみなされるため、L1・L2 それぞれの作文の書き方を比較しながら指導することも大切であると提案した。

最後に、今後は参加者への半構造的インタビューとプロセス分析をあせて行い、本研究の結果を更に考察することや、中高生ならびに大学生に英文を論理的に書く指導を一貫して経年的に行い、彼らの英文がどのように変化していくかを見るような研究を行うことを方向性として述べ、本博士論文を結んでいる。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：染谷泰正、竹内 理、水本 篤）は、山下美朋氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうか確認した。その結果、同

氏は、(1) 必要単位 (10 単位) を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で (2) 論文 3 編 (うち査読あり学会誌 2 編)、(3) 口頭発表 9 回 (うち国際大会 2 回、全国大会 4 回を含む) を有し、(4) 博士論文聴聞会 (2017 年 6 月 3 日) も重大な問題の指摘なく終了しており、論文提出のすべての要件を満たしていることが確認できたため、研究科委員会 (2017 年 7 月 26 日開催) に報告し、同氏からの論文提出を認めるとの判定を下した。その後、指導教員の交代 (理由: 染谷指導教授の予期せぬ退職) が生じ、十分な指導期間が担保できなかったため、聴聞会の有効期限 (原則として当該学期および次学期) を半学期間、特別に延長する配慮が、2018 年 4 月 11 日開催の研究科委員会で認められた。これを受けて、2018 年 9 月 25 日に山下氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会 (2018 年 10 月 10 日開催) において承認された論文審査委員会 (主査: 竹内 理、副査: 山根 繁、副査: 水本 篤; 学外委員: 今尾康裕 大阪大学大学院准教授) での審査に入った。また、同時に所定の閲覧期間と手続きをもって、研究科構成専任教員への論文開示も行った。

提出された英文論文 (219 頁) では、広範囲に文献の渉猟を行っており、参照論文の数は 199 編にのぼる。これらの文献を研究テーマとの関連性から精査し、

日本の EFL 環境で、L2 ライティングの結束性や論理性、およびその逸脱というテーマを選定し、その後3つの実証研究に取り組んだことは、その手法の手堅さの面から高い評価に値するものと言えよう。また中心となる実証研究では、自らもその構築に関与した大規模学習者コーパスを駆使しデータを得て、各種手法を採用しながら分析し、これらに基づいて適切な主張・解釈を行っており、実証性を重んじる氏の研究アプローチがよく顕れている。

上記に加え、以下の点からも本論文は優れているものと判断する。

- (i) 日本人大学生英語学習者を対象にして、今まであまり研究されてこなかった L2 ライティングの論理構成や結束性の側面に切り込んだこと、
- (ii) 学習者の L2 能力という変数の影響を考慮した研究を行い、多くの教育的示唆を得たということ、
- (iii) 上記の成果が、国際学会でも複数回発表され、英語コーパス学会の紀要『英語コーパス研究』に 2 編も掲載されるなど、その独創性や有用性が評価されていること。

なお、本論文の研究では、研究参加者に対して十分な説明をおこない、彼らが同意のもとで参加する（あるいは辞退する）形式を採用していた。また、研

究のいかなる時点でも、自らの意思でデータを撤回することを参加者に許容しており、研究倫理の面からも問題がないものと考えられる。

上記を受けて、山下美朋氏の学位請求論文が、研究の方法や内容、倫理的配慮、記述の体裁や論理などすべてにおいて、本研究科の博士号に値する水準に達していることを、審査委員会一同が認めた。